日本語オノマトペの交替形語彙分析

An Analysis on the Japanese Onomatopoeia Alternation Form Words

角　岡　賢　一
KADOOKA Ken-Ichi

キーワード

［交替形］Alternation　・［反復型］Reduplication　・［語基］Base
［自由型］Free Form　・［拘束型］Bound Form

1．はじめに

この小論では日本語オノマトペ語彙のなかで、複数の語基が交替しているものを「交替形」(alternation form) *1と呼ぶ。「かたこと」「むしゃくしゃ」「ちらほら」「すてんころり」などの語である。これら四つの語は、各語のなかでそれぞれ語基が「かた／こと」「むしゃ／くしゃ」「ちら／ほら」「すてん／ころり」というように交替している。交替の単位となっているのは、上の例では順に母音・子音・音節（またはモーラ）・語基そのものである。

交替形も、ある意味では反復と同じような効果を生じると言える。それは交替形も反復形も語全体としてのモーラ数が、非反復型語基の倍数になるということである。つまり、反復においては語基を繰り返すことによって、全体としての語は語基の長さの何倍かになるのである。例えば「きらきら」という形は、2モーラの語基「きら」を2回反復することによって4モーラになっている。他方で交替形の場合は、異なる語基を重ねるという点が同一語基の反復とは違う。しかし交替形において交替させる語基は、同じ長さのものを並べるのが原則である。例えば、2モーラの語基を二つ交替させて4モーラにする、というものである。更に、オノマトペ標識を加えるさいも、前半と後半で同じように扱うのが基本である。従って、交替形の語形は偶数モーラの形になっているものがほとんどである。

語の前半と後半でモーラ数が対称になる語形が交替形では多い。例えば4＋4モーラの「ずんぐりむっくり」、3＋3モーラの「すてんころり」という語形を挙げることができる。「ずんぐりむっくり」では、前半の語形「ずんぐり」の語基は「ずぐ」、後半「むっくり」の語基は「むく」である。この「ずぐ」「むく」に、Q／N＋「り」という複合オノマトペ標識が適用されて「ずんぐりむっくり」という形になっている。「すてんころり」では、前半の語基「すて」にはオノマトペ標識N、後半「ころ」には「り」が接辞されている。語基のモーラ数も、オノマトペ標識が適用された形のモーラ数も前半と後半で対称になっている。もち

*1　Kadooka（2002b）においては、音素の交替をaltered reduplication、語基の交替をdoubled baseと称して区別している。英語の呼称に多少の異動はあるが、示している範疇は同一である。

ろん、対称性という規範には例外もある。例えば、「すてんころり」には、前半にのみオノマトペ標識Qが接辞される「すってんころり」という語形がある。「すってんころり」は前半が4モーラ、後半が3モーラで非対称になっている。

しかし同一語基の反復と、複数語基交替形には本質的に異なる点がある。それはモーラ数という音韻面ではなく、語基が表現する様態に関する側面においてである。交替形は、複数の自由型語基を1語の中に組み合わせることによって、複雑な様態表現となる。反復形は語基が一つであるから、表現する様態もその語基に関する事象だけであり単純である。例えば反復型「きらきら」では、何かが光る様態を表現するのみである。他方で交替形「すってんころり」は、まず「すってん」と滑り次に「ころり」と転ぶ、というように2種類の動作が連続して描写されている。このような様態表現の複雑さという面において反復型は無標であり、交替形は有標であると言える。

更に交替形を形成する語基には、他の派生形が派生されない拘束型が多く含まれるということも指摘することができる（自由型と拘束型については、第2節で述べる）。交替形における拘束型の語基は、擬態語に限ってみられる。例えば、物事の進行が順調でないことを表現する「ぎくしゃく」という語には、「ぎく」と「しゃく」という二つの語基が混在している。「ぎく」という語基からは、「ぎくぎく」など、他の派生形が派生される。しかし「しゃく」という語基からは、「ぎくしゃく」と同じ意味での「しゃくしゃく」などの形は派生されない。従って「しゃく」という形は拘束型である。ではなぜ「しゃく」という形態素が存在しているのかという疑念が生じる。これは、「ぎく」という意味のある語基の第2モーラ「く」と韻を踏むために、第1モーラに適当な音を当てはめて語形を作ったと考えられる。交替形にはこのようにして形成された語が多い。

拘束型の語基が存在する理由として、次のようなことが考えられる。上の「ぎくしゃく」の例において観察されるように、拘束型の語基「しゃく」は自由型の語基「ぎく」に後続するような語順になっている。即ち「ぎくしゃく」という語全体の意味は主として「ぎく」が担い、「しゃく」は語調を整えるような役割を果たしていると考えられるのである。語基「ぎく」と「しゃく」は、1モーラ目の子音も母音も互いに相違しているが、2モーラ目は「く」で共通している。これは、一種の脚韻であると言える。交替形の多くは、このような押韻の効果を狙っているものと考えられる。

角岡（2002a：35）に示した数字では、交替形87例に対して単純反復型だけで715語挙げられている。この87例中には、4モーラ交替形「ぴーちく、ぴーぽー」の反復である「ぴーちくぴーちく、ぴーぽーぴーぽー」2例が含まれている。語数をみると、日本語オノマトペにおいては反復形の語彙が交替形の約8倍である。反復形は、語基を単純に反復することによってオノマトペ語彙としての効果を出す。それに対して交替形は、複数の語基を組み合わせることによって、語の構造や意味が複雑になる。反復形の語が交替形の語の8倍もあるという集計は、日本語は交替形よりも反復形を好むという傾向を表わしている。英語においては交替形の方が多いという傾向と対照的である。

拘束型の語形が存在する理由は、自由型の語基と組み合わせられている場合は、頭韻や脚韻を踏むためであると説明ができる。しかし、実際のデータを観察すると、どの語基もすべて拘束型であるような交替形が多く存在する。複数の語基のなかに一つでも自由型の語基があれば、語全体としての意味はその自由型の語基によって表現されるという考え方をするの

が自然である。しかし、拘束型の語基だけで語が形成されている場合は、そのような考えはできない。この問題については、第2節で考察することにする。

村田（1993）は、日本語と英語のオノマトペ語彙の語形について議論しているなかで、交替形の語をＸＸ'またはＸ'Ｘというように表記している。Ｘ'Ｘというのは、後半の語形を基本として、前半が変形されているという表示である。例えば日本語の「むしゃくしゃ」の語形成の過程について、後半の「くしゃ」を語基として、反復して「くしゃくしゃ」とした後、前半を「むしゃ」と変形したと説明している。「くしゃ」という語基には、気分が晴れないという意味がある。一方「むしゃ」は、「むしゃくしゃ」と同じ意味を表わす派生形のもとになる語基ではなく、何かを行儀悪く食べる様態の描写である。英語で同じような語形成の過程を経た語として、razzle-dazzle を挙げている。まず dazzle という形で「眩惑する」という意味を持つ語がある。次に dazzle を反復して dazzle-dazzle という語形にする。そして最後に前半を razzle という形に入れ換えることによって razzle-dazzle の語形ができる。

このように日本語と英語において交替形語基の一方が自由型であるものについては、同じような説明ができるというのは対照言語学的見地から興味深い。村田（1993）の定義するＸＸ'またはＸ'Ｘというパターンは、英語では多いが日本語では少ない。これらのパターンは子音の交替になることが多いと考えられる。このことについて詳細は第5節で議論する。

交替形には、母音のみが交替しているもの、子音だけが交替する語、語基のうちの1モーラだけが交替を示すもの、語基全体が交替しているものがある。これら交替の単位ごとの議論は、第4節以降で行なう。

母音だけで交替を示す語に比べて、子音だけで交替する語は非常に少ない。これは、日本語オノマトペにおいては、音象徴に関して母音に比べて子音が優位に立っており、子音を入れ換えてしまうと語基の表わす様態が異なってくるからであると指摘することができる。このことについては、第5節で議論する。

村田（1993）に挙げてある「がらがらどすん」「がらがらぴしゃん」などの語は、本稿では交替形とはみなさない。それぞれ「がらがら」と「どすん」、「がらがら」と「ぴしゃん」という2語に分析するのが妥当であると考えられるからである。

以下の分析では、語基が自由型であるか拘束型であるか、また語基の交替が母音もしくは子音という音素の次元によるか、あるいは語基そのものが入れ替わっているか、という基準で節を立てていく。

2．自由型と拘束型

交替形の語基には2種類ある。即ち、交替形の語基それぞれが固有の派生形を持っているものと、交替形の語基を分離してしまった形からは他の語形が派生できないものである。前者を自由型の語基、後者を拘束型の語基と呼ぶことにする。派生形の数について議論するとき、拘束型の語基は、派生形が一つしかない――即ち語基の形そのもの――ことからこれを「孤立形」とも呼ぶこととする。数学的比喩を用いるとすれば、拘束型（孤立形）はオノマトペ語彙の「素数」である。

交替形でない日本語オノマトペの語基も自由型と拘束型の2種類に分類することができる。交替形の語を議論するうえにおいて特にこのように1節を設けているのは、交替形の語にお

いて拘束型の語基同士が組合わさっている場合を考察するためである。これは一語中に複数の語基が混在する交替形特有の現象である。

擬音語はそれぞれの語基が別々の音色を描写しているので、すべて自由型の語基から構成されている。しかし擬態語の語基のなかには、自由型同士の組み合わせ、自由型と拘束型が組み合わさっているものと、拘束型同士の組み合わせになるものというように三つのパターンがある。

自由型の交替の例として、「からころ」という語を挙げることができる。この語は、下駄で歩いているような音を描写する擬音語である。まず、この語を前半の「から」と後半の「ころ」という語基に分離することができる。それぞれの語基は、共に硬いもの同士が接触して立てる音を表現するものである。「から」「ころ」という各語基の音色の差は、各語基の母音によって表わされている。つまり「から」においては母音は二つとも/a/であり、「ころ」の母音/o/よりも響きが大きい。「ころ」は、「から」に比べるとこもったような音色になる。次に、その語基からそれぞれ「からから」「ころころ」などの形を派生することができる。「からころ」というこの交替形の成立の過程を考えると、「から」「ころ」という別々の語基が必要に応じて組合わさったという見方をすることができる。

拘束型の語基だけでできている語の例としては「あたふた」がある。この語を前半「あた」と後半「ふた」に分離して語基と仮定し、派生形を考えようとしても、「*あたあた」、「*ふたふた」という反復形は存在しない。反復型以外でも、オノマトペ標識を付加した派生形も存在しない。このような拘束型の語基は、抽象度が高い。但し山口（2003：7）の説明によると、「ふたふた」という語形が室町時代には「あたふた」と同じ様態を表現していた、という。そしてもう一方の語基「あた」は、江戸時代に頻用された「あた面倒」などの「あた」であり、程度を強調する意からの転用か、と推定している。このように通時的に語形と意味の変化を辿ってみると断定が困難となってくるので、以下では基本的な立場として共時的に考察を進めていく。

更に、両者の中間的なタイプもある。即ち二つの語基のうち一方は自由型であるが、他方は拘束型であるという場合である。「ぎくしゃく」を例にとってみよう。前半の語基「ぎく」は、「ぎくりとする」というように、他の派生形の存在する自由型である。しかし後半の「しゃく」は、「*しゃくしゃく」[*2]「*しゃくり」「*しゃくっ」などと派生形を作ることができない。「しゃく」という語基に生産性がないからである。

拘束型とは語基の抽象度が高く、どういう様態を表現しているのか想像ができないという語類である。つまり、「あたあた」「ふたふた」と言っても「慌てふためく」という意の擬態語とはならない。但し上述のように、通時的には「ふためく」という動詞は擬態語「ふたふた」からの逆成であると考えられる。また「しゃくしゃく」という語形だけでは「物事が円滑に進行しない」という様態は表現されない。

拘束型の語基同士の組み合わせによるオノマトペは、すべて擬態語である。擬音語に比べて、擬態語はそれだけ抽象度が高いという傍証となっている。前節でも述べたが擬音語の交

---

*2 「余裕しゃくしゃく」という場合の「しゃくしゃく」は、漢字で「綽綽」と書かれる語（擬似オノマトペ、角岡（2001b）参照）で、ゆるやかなさまを表現している。「綽綽」という単独での用例は日本語には見られないであろうが、「余裕綽々」は四字熟語として定着している。

替形というのは定義上、各語基が別々の音を描写しており、それぞれが独立的である。

自由型の語基というのは、それぞれの語基から独自に他の派生形ができ、語基の抽象度が低い。このことから考えても、自由型の語基が組合わさってできている交替形は、複数語基の意味が単純に複合したものであり、本来語基に備わっていた様態表現を組み合わせて新たな語形にするために語基が結合されたと解釈できる。

しかし分離された語基が拘束型だけである場合は、事情は複雑である。つまり、拘束型の語基同士が複合語化して、なぜオノマトペとして意味のある語ができるのか、という点を考察しなければならない。

まず拘束型の語基だけからできている語を、語基に還元しない形で挙げる。

(1) つべ-こべ　やき-もき　しどろ-もどろ　あた-ふた　のほ-ほん　ちぐ-はぐ　ちや-ほや
へど-もど　つう-かあ　てんや-わんや　そそ-くさ　へべ-れけ　ちく-たく
えっちら-おっちら

「ちくたく」を除いてこれらの語はすべて擬態語であり、それぞれの語基には固有の意味がないと考えられる。「ちくたく」は英語tick tackの借用であり、擬音語の英語からの借用はこの1例のみで、極めて珍しい。擬音語は、定義上語源が明確である。擬態語の借入語として「ジグザグ」zig zagの1例のみが挙げられる。

例えば交替形「つべこべ」の語基「つべ」と「こべ」には、それぞれの語基から連想される特有の意味はない。(1)に挙げられている語は大部分が擬態語であるから、擬音語に比べて抽象的な様態を表現しているのである。語源を辿ろうとしても、辞書にはいずれの語彙項目についてもほとんど説明が為されていない。「へべれけ」など語源が不明であるのみならず、語基を確定させるための分節についても他の語彙に類例を見ないような特殊さを呈している。「語基は最大2音節」という原則に従って「へべ＋れけ」と分節しているが、これ以上の詳細を追求することは擱く。*3

語形成の過程について考えてみても、個々の語基に意味が固有ではないのであるから、拘束型同士が組み合わされる必然性は考え難い。個々の語基に意味がないにもかかわらず、交替形として組み合わされるとオノマトペとして固有の意味を持つというのが興味深い点である。

次に、拘束型と自由語基の組み合わせとなっている語彙を列挙する。自由語基から派生した語形に下線を付す。擬態語と、純然たる擬音語とに区分して示す。

---

*3　落語で、この語の強調型として「へべのれけれけ」という語形が聞かれる。これによって、「へべ＋れけ」という分節の正統性が傍証されるものと考える。また語源は、酩酊して呂律の回らない様態を描写している、と解するのが妥当であろう。

(2)《純然たる擬音語》　9語

ぴー-ちく-ぱー-ちく　こけ-こっ-こー　こん-ちき-ちん　ぴー-ひょろ-ひょー
ぴー-ひょろ-ろ　ぴー-ちく　ぴー-ひゃら　ちゃん-ちゃん-ばら-ばら
ぴー-ちく-ぴー-ちく

《擬態語》　19語

しっちゃか-めっちゃか　すた-こら　てき-ぱき　つん-つる-てん　ちょこ-まか
どぎ-まぎ　ぎく-しゃく　のら-くら　のらり-くらり　ちら-ほら　ちらり-ほらり
どん-でん　ちゃらん-ぽらん　のんべん-だらり*4　ぶつ-くさ　がた-びし　がた-くり
がた-ぴし　ぐー-すか

この2分類のうち、擬態語には擬音的効果を含んだ語彙も混じっている。「ぶつくさ、がたびし、がたくり、がたぴし、ぐーすか」が該当する。いずれも、音声と様態が同時に表現されている。例えば「ぶつくさ」では不平不満を述べ募る様態が、当然発せられている音声と共に活写されている。「ぐーすか」においても熟睡する様態が、鼾の擬音と共にこの一語に盛り込まれている。「がたびし、がたくり、がたぴし」の3語では、人間の立てる物音と様態表現が渾然一体となっている。対して「純然たる擬音語」というのは、そのような話し手の主観を伴わない部類で、動物の鳴き声と物音に限定される。

(2)においては自由語基と拘束型語基とが混合されて交替形語形が形成されているのであるが、母語話者としては自由型と拘束型の差は意識していないように思われる。これは拘束型語基同士が組み合わさって交替形語彙となった場合と同様であり、その理由については今後更に追求してみたい。語例の数が反復型に比較すると少ないことから、オノマトペ語彙としては有標であることが示唆されている。可能性としてはこれら語形が「個別の語彙として使用と共に定着していった」とも考えられるが、仮にそうであればその過程の検証が必要である。

(2)所載の擬態語について自由型語基が前半に来るか、後半に位置するか検証する。「つんつるてん」のみは3語基から構成される、と仮定しているのでこれ以外の18例を分析する。前半に自由型語基が位置する語は12例に対して後半が6例と、比率としては1：2で前半に位置する場合が多い。語構成の過程について推定してみると「前半に自由型語基があって、後半が調子を整えるために加えられた」と説明する方が合理的である。しかしこれは逆に、後半が自由型語基である語例に適用しにくい。

最後に自由語基同士の組み合わせによる語彙群をモーラ別に列挙する。

---

*4　「のんべん-だらり」の前半「のんべん」は語基「のべ」からの派生、かつ第2母音の交替した「のび」と共通と見なす。語基「のび」からは「のんびり」「のびのび」などの派生形が得られる。語基「のび」と「のべ」では、第2母音で/i/-/e/と交替している。高母音/i/の語基から派生する「のんびり」「のびのび」では、話者の主観として「好ましい」という判断が盛り込まれている。一方「のんべんだらり」の「のんべん」では、中舌・前母音/e/に固有である負の価値観が入り込み、好ましくない様態であることを示唆している。

(3)《4モーラ》

どん-ぱち　どん-ちゃん　がた-びし　めちゃ-くちゃ　ぱち-くり　ぴん-しゃん
ぴん-しゃこ　うろ-ちょろ　べちゃ-くちゃ　どた-ばた　きん-きら　むしゃ-くしゃ
ぺちゃ-くちゃ　ちん-どん　ぴん-ぽん　がさ-ごそ　がた-ごと　から-ころ　かさ-こそ
かた-こと　じた-ばた

《5モーラ》　どん-ぴしゃり　こてん-ぱん　ずでん-どう　ぴん-ぽーん

《6モーラ》　ぎん-ぎら-ぎん　きん-きら-きん　すてん-ころり　とん-ちん-かん
どたん-ばたん　ぬらり-くらり　ちん-ちろ-りん　からん-ころん　かたん-ことん
かたり-ことり　きん-こん-かん

《7モーラ》　すってん-ころり

《8モーラ》　しんねり-むっつり　すってん-ころりん　しゅっ-しゅっ-ぽっ-ぽっ
ぴー-ぽー-ぴー-ぽー　かったん-こっとん　きん-こん-かん-こん

「ぬらりくらり」は自由語基「ぬら」と「くら」の組み合わせと分類しておくが、これら二つの語基の元来の意味と「ぬらりくらり」では表現している様態が異なることに留意する必要があろう。「ぬら」は子音/n/の音象徴性による粘性の様態表現、「くら」は眩惑される様態を表現している語基である。これらが組み合わさって「ぬらりくらり」となると、相手の追求を巧みに躱す様態を表わすようになる。意味的には、第1音節の母音が交替した「のらりくらり」と共通である。「相手の追及を躱す」という意味では「のらりくらり」が「ぬらりくらり」よりも一般的と考えられるが、「のらりくらり」の前半語基「のら」は拘束型である。また「ぬら」「くら」という語基は自由型ではあるが、「相手の追及を躱す」という意味は含意していない。

モーラ別では5あるいは7という奇数拍語形が少ない。この原因は奇数拍語においては、2語基の組み合わせによって一方の語基にのみオノマトペ標識が接辞されているという非対称的語形成過程に求められる。5モーラ「どんぴしゃり」では前半「どん」が語基そのもの、後半は語基「ぴしゃ」に「り」が接辞されている。7モーラ「すってんころり」では前半語基「すて」にQ・Nというオノマトペ標識2個、後半「ころ」に「り」が接辞と、やはり非対称的接辞である。

2モーラ語基三つの組み合わせは「きんきらきん、ぎんぎらぎん、とんちんかん、ちんちろりん、きんこんかん」と5例見られる。これらはいずれも語基そのものの組み合わせであり、オノマトペ標識の接辞はないと考える。対照的に2モーラ語基二つの組み合わせで構成されている6モーラ語形では、すべてにオノマトペ標識が接辞されている。

これら自由語基同士の組み合わせによる語形(3)を、拘束型語基で構成されている(1)や(2)と比較してみても、格段の差は認められないように思われる。これは語基として抽象的な語形を比較するのではなく、辞書見出し形を比べているためと考えられる。(1)で挙げた拘束型語基同士の組み合わせは抽象的である。

3．語基の数による分類

本節では交替形の分析としてまず、一つの語において交替する語基の数で交替形の語彙を

分類し検討していく。

交替形というからには複数の語基が組み合わさっているのであるが、交替している語基は二つである場合が圧倒的に多い。データベースに挙げられている交替形87のうち、2語基のものが70であるのに対して、3語基のものは9、4語基のものは6にすぎない。[*5]「ぴー-ひょろ-ろ、ぴー-ひゃら-ら」5モーラ目「ろ、ら」はそれぞれの第4モーラの反復である。ここではこの「ろ、ら」を語尾と見なし、「ぴーひゃらら、ぴーひょろろ」2語全体の構成を「2語基＋語尾」と分類する。

一つの語形において、5語基以上が交替する例はデータベース中になかった。語基が5つ以上の交替形が存在しない理由は、次のように考えられる。一つの要因は、オノマトペ語彙は全体で最長でも8モーラであるという形態素としての制限である。他の一つは、語基は2モーラのものが多いという観察である。この二つの条件のもとでは、理論的には、1モーラの語基が8つ交替することもありうる。しかし、実際には外見上で4語基が交替するのが最多である。結果的に、交替形においては交替する語基は二つから四つの間に分布していることになる。

以下に、3語基の交替形(4)と4語基の交替形(5)を示す。語基の切れ目にハイフンを付しておく。2語基の交替形は、数が多いのでここには示さないことにする。

(4)《3語基》　ぎん-ぎら-ぎん　つん-つる-てん　きん-きら-きん　こん-ちき-ちん
　きん-こん-かん　とん-ちん-かん　こけ-こっ-こー　ぴー-ひょろ-ひょー　ちん-ちろ-りん
(5)《4語基》　ちゃん-ちゃん-ばら-ばら　きん-こん-かん-こん　ぴー-ぽー-ぴー-ぽー
　ぴー-ちく-ぱー-ちく　しゅっ-しゅっ-ぽっ-ぽっ　ぴー-ちく-ぴー-ちく

3語基の語は、擬態語が4例に対して擬音語が5例である。まず、数の少ない擬態語について述べる。

「ぎんぎらぎん」は「きんきらきん」の子音 /k/ が有声化したものである。これらの2語は、語全体として、金属性の表面に光沢があって光を反射する様態を表現している。この2語は、程度の差はあるが共に基本的に上述のような様態を描写しており、音韻的にも子音が有声化されて関連しているので派生関係にあると考えられる。どちらも第1語基と第3語基が同じ形で、第2語基だけが違う形になっている。語基「きん」—「きら」、「ぎん」—「ぎら」は、それぞれ第2モーラが異なるだけで、第1モーラは両方のペアにおいて同じ子音・母音でできている。従って、三語基「きん」—「きら」—「きん」、「ぎん」—「ぎら」—「ぎん」が頭韻を踏んでいると言ってもよい。しかし、三語基のうちで「光を反射する」という様態を表現しているのは、第2語基「きら、ぎら」のみである。反面、第1・第3語基の「きん／ぎん」というのは、光を反射する様態を描写する語基とは考えにくい。この語基を反復した形のうち、「きんきん」は光というよりは金属性の音を表現している。反復型「ぎんぎん」は、比較的最近の用法で辞書にも収録されていないが、服装などが派手な様子を表現している。

---

*5　「ぴーちくぱーちく」は、前半の「ぴーちく」と後半の「ぱーちく」をそれぞれ2語基とみなした。結果として、この語は全体で4語基となるが「ちく」が重複している。理由は、「ぴーちく」と「ぱーちく」の「ちく」の部分が共通であるので、「ぴー」「ぱー」も分けるのが妥当であると判断した。

どちらも、光の反射と直接結び付けることは難しい面がある。他方、「きら／ぎら」は、光の反射を第一義的に表現している。「きらきら／ぎらぎら」というように反復形にしてみると、「きら／ぎら」という語基が光の反射を表現しているということがよくわかる。
「つんつるてん」においても、2番目の語基「つる」が、「物体の表面が滑りやすい」という語全体の意味を主として担っている。この語においては、第1語基「つん」と第3語基「てん」は互いに異なる音形である。第1語基と第3語基が同じ形であった「きんきらきん」「ぎんぎらぎん」とは語形成のパターンが異なっている。「つん」と「てん」は、母音の交替しているパターンで脚韻を踏んでいる。一方「つん」と「つる」は頭韻を踏んでいる。「つる」と「てん」は直接的な押韻関係はない。しかし、「つる」—「つん」、「つん」—「てん」という二重の押韻によって、三語基はすべて音韻的に関係づけられている。語基「つん」「てん」はいずれも、「つんつるてん」全体の意味とは直接関係がない。例によって反復形にしてみると、それぞれ「つんつん」「てんてん」となる。「つんつん」は態度が取り澄ましているという様態を表現する擬態語であり、「つんつるてん」の表現する意味とは全く関連性がない。「てんてん」は、該当する様態がない。「てん」は派生される形が全くないので、調子を整えるための一種の「接尾辞」と見なすのが妥当であろう。従って表面が滑りやすいという様態を表現した「つんつるてん」は、第2語基によって意味が表わされ、第1・第3語基は口調を整えるための無意味な語形であると言える。

以上の3語基交替の擬態語3語において、第2語基が語全体の意味にとって非常に重要であるというのは、興味ある現象である。三語基のうち、第1と第3の二つは、語全体の意味形成に寄与していないということになる。両端の語基が、ただ口調を整えるだけの目的のために存在しているようである。

もう一例の擬態語「とんちんかん」の語源は、鍛冶屋の鎚の音を模したものであった。従って語源的にはこの語は擬音語である。しかし現在用いられる場合は、「あの人はいつもとんちんかんなことを言う」というように言動が的外れであるという様態を表現しているので、擬態語である。

3語基交替の擬音語「こんちきちん」「きんこんかん」には、いずれも金属音を象徴する音素/k/が含まれている。各語基は異なる楽器なり器具の出す音を描写しており、互いに音色が異なっている。「こんちきちん」においては、語基中の子音として/k/だけではなく/t/も含まれている。音形に関係なくこれらの語について言えるのは、どの語基も等しい割合で意味の形成に寄与しているという傾向である。この点が、擬態語と擬音語において大きく異なる。
「こけこっこー」は鶏の鳴き声を模している。同じように鶏の鳴き声を模した擬音語で、「こっこっ」という語形があることから、まず「こ」を語基の一つと仮定する。そうすると「こー」はこの語基の母語を長音化した結果として派生形と見なすが、「こけ」は別語基として立てる。結果的に「こけこっこー」は二種類の語基三個に分節する。

4語基の交替するもの(5)は、すべて擬音語である。6つの語形のうち、「きんこんかんこん」と「ぴーちくぱーちく」を除いて2語基の交替形の反復である。これら2語の語基交替はABCBと表示することが出来る。この表示からも明らかなようにこれら語形は実質的には3語基であり、そのうちの一つを反復していると見なすことも可能である。残りの4例は、2語基交替4モーラの語形を反復することによって8モーラになっている。「ちゃんちゃんばらばら」は「ちゃんばら」[*6]、「しゅっしゅっぽっぽっ」は「しゅっぽっ」の反復であり、AABB型

と表示できる。「ぴーぽーぴーぽー」は「ぴーぽー」、「ぴーちくぴーちく」は「ぴーちく」をそれぞれ反復することによって8モーラになったABAB型である。

オノマトペ語彙として最長の8モーラで、交替形であるものには「しっちゃかめっちゃか」「えっちらおっちら」「しんねりむっつり」「ずんぐりむっくり」など、擬態語で2語基交替のものもある。「ずんぐりむっくり」は、Kakehi *et al.* (1996) において「ずんぐり」の項の中に収録されている。「ずんぐりむっくり」の後半「むっくり」は、「ずんぐり」とモーラ数や音形を合わせるために付け加えられたものであると考えられる。独立した擬態語である「むっくり（と）起き上がる」というときの「むっくり」と音形は全く同じであるが、意味的には関連性がみられない。この点から、「ずんぐりむっくり」の後半語形「むっくり」は前半語基「ずんぐり」と韻を踏むために借りてきた語形、と推定することが出来る。

このように、3語基・4語基が交替するそれぞれ(4)・(5)の語においては擬態語より擬音語の方が多い。擬音語の交替形において交替する語基の数が擬態語よりも多いということから類推して一般的に、擬態語の交替形では交替する語基の数は擬音語よりも少ないと言える。

擬態語において交替する語基の数が擬音語よりも少ないということの理由は、次のように考えられる。擬態語は、直接に物理的な音声を描写するのではない。その点において擬音語よりも抽象的であり、間接的であると言える。擬態語において、1語のなかの語基の数が増えると、描写が複雑になってどの語基がどの様態に対応しているのかわかりにくくなる。その裏付けが、上述の3語基交替の擬態語「つんつるてん」「きんきらきん」「ぎんぎらぎん」に現われている。いずれの語においても3語基のうち、語全体の表現する意味と直接関係していたのは第2語基一つだけであった。残りの二つの語基は韻を踏んで語調を整え、語としての体裁を整えている。語が表現する意味という観点からすると消極的な役割しか果たしていないのである。

更に、擬態語においては四つ以上の語基が1語のなかで交替している形はないという事実も指摘することができる。(5)のように表面的に4語基が交替しているという外観を呈する語形においても、そのうちの一つは反復であり実質的には3語基であった。これも1語のなかで交替する語基の数が多いと、擬態語においては表現が複雑になり焦点が拡散してしまうという要因を指摘することが出来る。2語基交替の擬態語においても一方の語基が拘束型であることが多いのもこれらと同じ理由で、一語のなかにあまり多くの擬態語の語基を詰め込むのは不可能と推測される。異なる様態を表現する語基を他の語基と交替させるよりはそれ自体意味を持たない拘束型の語基を組み合わせる方が、交替形形成の過程として好ましいと考えられたと想像できる。

一方擬音語においては各語基が音色の違いを表現するので語基同士が一つの語のなかで衝突を起こすようなことはなく、どの語基も同じように1語のなかで等しく役割を果たしていると言える。例えば「きんこんかんこん」においては、「こん」が繰り返されているので3種類・四つの語基が交替している。この語は、「きん」「こん」「かん」という三語基がそれぞれ異なる音階のベルまたは鐘が鳴る音を描写している。各語基は、別々のベル（鐘）の音を表現しており、対等の立場である。

---

*6 「剣戟」という意味での名詞「ちゃんばら」はABAB型反復「ちゃんちゃんばらばら」からの逆成と考えられる。

次節以降で、語基のどの単位――母音・子音・モーラ全体あるいは語基そのもの――が交替しているかを、単位別に検討していく。

4．母音の交替

この節では、語基の母音が交替する語形を検討していく。

データベースのなかで、母音だけで交替する語は19ある。まず当該語彙全部をモーラ別に掲げる。

(6) 4モーラ：ぴんぽん　がさごそ　ちくたく　どんでん　かたこと　かさこそ　からころ
がたごと
5モーラ：ぴんぽーん
6モーラ：からんころん　かたんことん　かたりことり　きんこんかん
8モーラ：きんこんかんこん　えっちらおっちら　がったんごっとん　ぴーぽーぴーぽー
かったんこっとん　ぴーちくぱーちく

5モーラの「ぴんぽーん」1語を除いて、すべて偶数モーラからなっている。例外になっている「ぴんぽーん」は、後半の語基「ぽん」がオノマトペ標識Rによって1モーラ増えて3モーラとなり、全体で5モーラになったものである。オノマトペ標識Rが入らない最も基本的な形は、4モーラの「ぴんぽん」である。この擬音語は玄関のチャイム音を模した語形であるから、最近――恐らくここ50年ほど――洋風化された生活の中で定着した語彙である。「ぴーちくぱーちく」は、4語基交替で、「ぴー」と「ぱー」の母音も交替しているパターンである。この語形を4語基交替と考えたのは、「ぴーちく」と「ぱーちく」の「ちく」の部分が共通しているからである。同じように雲雀の鳴き声を模した「ぴーちくぴーちく」という形もある。「ぴーちくぴーちく」は語基交替の反復と分類している。

上で述べた「ぴんぽーん」「ぴーちくぱーちく」に加えて「ぴーぽーぴーぽー」も、長母音が交替しているというパターンである。もっとも、母音の長音化はオノマトペ標識Rとして表示して処理しているので、交替する母音が短くても長くても実質的に変わりはない。「ぴんぽん」と「ぴんぽーん」を例にとって説明しよう。ローマ字表記をすると、この二つはそれぞれ /pin-pon/、 /pin-poRn/ となる。つまり、母音の長音化であるオノマトペ標識Rがあるかないかの差である。オノマトペ標識Rはかな表記の音引き記号「ー」が対応している。基底形は、短い母音で対立している語基の「ぴん」と「ぽん」である。その「ぽん」の方にだけオノマトペ標識Rが加えられたのが「ぴんぽーん」という派生形である。ここでは、オノマトペ標識Rという考え方によって長母音を表記すれば、長母音が交替する語形も適切に処理できるということが示されている。

(6)の語のうち、「どんでん」「えっちらおっちら」の2語を除くとすべて擬音語である。「どんでん」は複合語「どんでん返し」という形でのみ用いられる擬態語である。「どんでん返し」の「どんでん」はオノマトペにあっては例外的で、この複合語形でしか出現しない。「どんでん」単独では辞書見出しとならないのである。「えっちらおっちら」は、範疇としてはオノマトペというよりは感動詞（かけ声）である。従って、実際に用いる場合も直接の引用形とし

ての用法しかない（例えば「えっちらおっちら（と）坂道を登った」）。実際の用例においては、擬態語的に「労力を費やして何かの作業をする」という様態を描写する。

(6)所載の語彙中で三語基の交替しているのが、「きんこんかん」である。表面的に4語基交替のパターンになっているのが「きんこんかんこん」と「ぴーちくぱーちく」である。8モーラの「きんこんかんこん」は、6モーラの「きんこんかん」に「こん」が反復されて付け加わっているだけである。従って語基の種類は「きんこんかん」と同じく三つである。雲雀の鳴き声を聞きなした語形「ぴーちくぱーちく」も上述のように、「ちく」が共通であるから語基の種類は三つとみなしている。

残りの擬音語は、5モーラの「ぴんぽーん」を含めて2語基交替4モーラの語形にオノマトペ標識が付加されたものである。「かたこと」を例にとってみよう。「かたこと」は語基「かた」と「こと」から成っており、各語基において両方のモーラの母音/a/と/o/が交替している。「かた」「こと」という語基は、両方とも硬い物が接触して立てる音を描写している。母音の相違によって微妙な音色の違いが表現されている。語基「かた」においては二つの母音が/a/であり、語基「こと」の/o/よりも大きな音を表現している。二つの語基が組合わさった交替形としては、まず同じ4モーラの語形で各語基の第1子音が両方とも有声化された「がたごと」という形がある。この形は有声化によって、描写している音が二つの語基「がた」「ごと」が、共に「かた」「こと」のときよりも大きく聞こえるという音声／音韻的象徴である。次に各語基の語末にオノマトペ標識Nを付加することによって「かたんことん」という6モーラの形になる。オノマトペ標識Nは音が響くという意味を付加する。同じ6モーラの形で、オノマトペ標識「り」を各語基の語末につけた「かたりことり」という語形もある。「り」は、1音節増えることによって余分に響いているという語感が加わっている。加えてオノマトペ標識「り」は、動作が完結するという意味あいを象徴している。従って「かたりことり」という形においては、「かたり」「ことり」という単位で、1回ずつ完結性を持っているという語感が示される。各単位間に区切りがあると考えることもできる。

6モーラの「かたんことん」の各形態素の第2モーラにオノマトペ標識Qを挿入すると、8モーラの「かったんこっとん」という語形ができる。挿入されたこのオノマトペ標識Qはこの場合、音を立てる間にどこかぎこちない感じがすることを示している。この語感はオノマトペ標識Q独特の、語基の表現している様態がひとまず中断されているということを表わす象徴性から由来するものであろう。更にこの「かったんこっとん」の各形態素の第1子音を有声化した形「がったんごっとん」という形もある。

残りの交替形擬音語についても「かたんことん」と同じことが言える。交替形の擬音語が表現しているのは、音源が非生物の場合ばかりである。そのような音を日本人が「聞きなし」た形が上記のオノマトペ語彙の音形である。自然界の微妙な音色をできるだけ忠実に日本語で再現しようとした結果が、交替形という語形に表われたと考えることができるであろう。

5．子音の交替

本論文で考察している語彙範疇において語基のうち1子音だけで交替を示す語は、母音の交替に非常に比べて数が少ない。この理由は、音象徴面に求めることが妥当であろう。即ち、オノマトペ語彙の音象徴性は主として子音によって表現される故に子音が交替すれば、その

語彙全体が表わす様態に重大な変化が生じる。その故に、オノマトペ語彙において子音の交替は最小限度に観察される、と推定できる。

本論文で考察する子音交替の対象としてデータベースに挙がっているのは、「むしゃくしゃ」「むちゃくちゃ」[*7]「ぬらりくらり」の3語のみである。いずれも擬態語である。「むちゃくちゃ」という語形は、Kakehi *et al.*（1996）には見出しとして挙げられていない。但し「めちゃくちゃ」という形は収録されている。語形としては「むちゃくちゃ」が基底形であり、「めちゃくちゃ」は「むちゃくちゃ」の変異形である。『日本語語源辞典』によると「むちゃくちゃ」の「むちゃ」は、仏教用語の「むさ」（無作）からか、と説明している。後半の「くちゃ」は調子を合わせるために付け足されたものである。このような造語法は、オノマトペ語彙特に交替形においてよくみられる。ここでは後半の「くちゃ」の付加によってオノマトペ的語感が示されている。山口（2003：554）において「めちゃくちゃ」の項には「紙などが無造作に丸められて皺だらけであることを表わす『くちゃくちゃ』とが合わさって出来た」と説明されているが、他方で「むちゃくちゃ」では後半「くちゃ」を「『むちゃ』を強調する語」と解しており、一貫しない。[*8]

「のらりくらり」の「り」はオノマトペ標識であるからこれを除くと、語基は「ぬら」と「くら」という形になる。この語は各語基の第1子音 /n/-/k/ だけで交替を示し、他の音素は同じである。しかし、「ぬらりくらり」という語形は、同じ意味の「のらりくらり」の変異形であると考えられる。[*9]「のらりくらり」という語形においては、語基「のら」と「くら」が交替している。この語基の形では、第1モーラがそれぞれ「の」と「く」であり、子音だけではなく母音も異なるので、モーラ全体が交替していることになる。従って、純粋に子音だけで交替している語は「むしゃくしゃ」「ぬらりくらり」「むちゃくちゃ」という3語のみである。

母音だけで交替していた語が19語であったのに対して、子音だけの交替は上でみたように3語のみである。母音の交替形と子音の交替形を音素レベルの交替とみると、子音は様態を象徴するという機能が母音よりも大きいために、子音が交替すると交替形の語が描写している様態の差が大きくなりすぎるということが考えられる。

---

*7 「むちゃくちゃ」から「めちゃくちゃ」という変異形ができた理由を、次のように推測することができる。「むちゃくちゃ」は本文の議論にもあるように、各語基「むちゃ」と「くちゃ」の第1子音だけが交替している。しかし日本語は、この子音だけの交替というパターンをあまり好まないらしく、「むちゃ」の第1モーラの母音 /u/ も /e/ に変えて、結果的に第1モーラ全体が交替するようにしてしまった。できた形が「**め**ちゃくちゃ」である。日本語が子音だけで交替する語形を避けるということは、子音だけで交替している語が少ないという事実を証拠として挙げることができる。

*8 これは山口（2003）が項目ごとに担当執筆者を分けていることに起因するものと考えられる。「めちゃくちゃ」と「むちゃくちゃ」では別の執筆者が説明を加えている。

*9 通時的には、「ぬらりくらり」という形が先にあって、第1モーラの母音が /u/ から /o/ に変化することによって「のらりくらり」という形になったと考えられる。これは、「ぬらりくらり」という語形においては各語基の第1子音だけで交替する形が避けられたということである。即ち、「ぬら」の第1母音 /u/ を /o/ にすることによって、各語基の第1モーラ全体が、母音と子音ともに交替するようになった。しかし共時的には、語基のモーラ全体が交替している「のらりくらり」の方が基底形で、「ぬらりくらり」はその変異形であるような語感がする。

6．モーラ単位の交替

この節では、語基のあるモーラの母音と子音の両方、つまり1モーラ全体が交替するという語形について議論する。交替の単位を「音節」とせずにモーラに留めたのは、特殊モーラが関与するからである。例えば「きんきら」においては、前半の語形「きん」の第2モーラは撥音であり、後半の第2音節「ら」と交替を示す。「ら」は独立した音節であるが「ん」は特殊モーラであるため、本節の見出しも「モーラ単位の交替」とする。

データベースから上記の語形を拾いだしてみると、以下のようになる。(7)は4モーラの語、(8)は6モーラ、(9)は8モーラの語である。

(7) のらくら　めちゃくちゃ　どたばた　ぎくしゃく　じたばた　ちらほら　うろちょろ
　　べちゃくちゃ　ちんどん　やきもき　つべこべ　あたふた　ちぐはぐ　へどもど
　　ちやほや　どぎまぎ　てきぱき　きんきら
(8) ちらりほらり　どたんばたん　しどろもどろ　ちゃらんぽらん　のらりくらり
　　きんきらきん　ぎんぎらぎん
(9) しっちゃかめっちゃか　すっちゃかめっちゃか

これらの語はすべて、二つの語基が交替するものである。全体的に言えるのは、各語基の第1モーラが交替している語が多いということである。「きんきら」「きんきらきん」「ぎんぎらぎん」の3語以外は各語基の第1モーラが交替している。これは、オノマトペ語彙において第1モーラが語の音象徴において意味的に重要であるということの表われであろう。「きんきらきん」の2番目の「きん」は、「きんきら」の前半の語基「きん」が反復されたものである。「ぎんぎらぎん」は更に /k/ が有声化されて /g/ になっている。従って「きんきらきん」も「ぎんぎらぎん」も共に語基は2種類である。

各語基の第1モーラが交替しているということは、音韻的には脚韻を踏んでいるということになる。日本語の伝統的な詩型においては和歌や俳句といった定型詩はあるが、英語や中国語のような行末の脚韻は存在しない。しかし日常会話において用いられる上記のような日本語のオノマトペ語彙には、一種の脚韻技法がみられる。同様に考えて、各語基の第1モーラが共通で第2モーラが交替しているものは頭韻を踏んでいると言える。

上記の語のうち、擬音語は4モーラの「ちんどん」のみである。残りの語はすべて擬態語である。「ちんどん」の「ちん」は鉦の音、「どん」は太鼓の音という異なった楽器の音を描写している。

擬態語であっても、擬音語の要素を示す語彙も見られる。つまり、主として様態を描写しているのであるが、その様態のなかに具体的な音を感じさせる要素が含まれているのである。例えば、「どたばた」「どたんばたん」である。「どたんばたん」は、「どたばた」の各語基の語末にオノマトペ標識Nを付加した形である。これらの語は、騒いでいる様態や音を比喩的に表現しているような語感を示している。この語感は各語基から派生される形、例えば「どたどた」「ばたばた」についても同じであろう。「どたどた」と言うと、大きな足音を描写している。「ばたばた」は暴れている様子を表現している。「じたばた」も、同じように暴れている様子と音の両方を表現している。日本語のオノマトペで、擬音語と擬態語の境界が判然

としない場合があるのは、このような例があるからである。

擬態語のほとんどは、語基が拘束型である。拘束型の語基の特徴は、抽象性が高いということである。上記(7)－(9)の語基から、「のらくら」―「のらりくらり」の語基「のら」「くら」のように重複するものを除くと、44ある。そのうち、自由型の語基は次の13である。

(10) めちゃ　どた　ばた　ぎく　ちら　うろ　ちょろ　ちん　どん　どぎ（どき）
　　ぱき（はき）　べちゃ　くちゃ

「どぎ」は「どき」、「ぱき」は「はき」の連濁の結果できた形である。これら自由型の語基は、すべて反復によって派生形が形成される。「はき」は2子音/h k/双方が無声であるから、連濁として第1子音/h/が有声化されるのは一般語彙と同様である。しかし「どき」は第1子音/d/が有声あるのにも拘わらず、「どぎ」では第2子音/k/も有声化される。オノマトペ以外の一般語彙について、このように有声阻碍音を含む形態素が連濁の対象とならないというのは本居宣長（1730～1801）が「発見」したが、Lyman（1894）によって体系化されたため「ライマン氏の法則」と言及されてきた（屋名池（1991)、Haraguchi（2001））。これも、オノマトペと一般語彙が音韻的振る舞いにおいて異なっているという事例の一つである。

次に拘束型の語基を挙げる。

(11) のら　くら　ほら　しゃく　じた　やき　もき　つべ　こべ　あた　ふた　ちぐ
　　はぐ　へど　もど　ちや　ほや　まぎ　てき　しど　ちゃら　ぽら　しちゃ　すちゃ

「しどろもどろ」の各形態素の語末にある「ろ」は一種の語尾とみなして、語基は「しど」「もど」という形と仮定した。「もど」は「へどもど」の後半と同じ形である。「ちゃらんぽらん」の各形態素末の「ん」もオノマトペ標識Nとみなした。「しちゃ、すちゃ」はそれぞれ「しっちゃかめっちゃか、すっちゃかめっちゃか」の前半の語基と仮定した形である。前半4モーラ目の「か」は一種の語尾と考える。

これらの語基単独では、どのような様態を表現しているのか判然としない。ここにおいて自由型語基－具体的、拘束型語基－抽象的、という対比図式を描くことが出来る。しかし拘束型の語基同士であっても、組み合わさることによって交替形の語として意味的纏まりを成す。抽象的な拘束型語基同士の組み合わせによる交替形オノマトペが具体的意味を持つ理由については、次の機会に考察したい。

7．語基の交替

モーラ全体よりも大きな単位での交替型として、語基そのものの交替を検討する。語基は典型的には /CVCV/ という2音節形であると仮定したが、語基が交替するというのは四つの音素のうち三つ以上が入れ替わるものを指す。つまり子音・母音あわせて四つの音素のうち、一つだけは共通になっているものも語基が交替するとみなすのである。例えば「ぱちくり」という交替形おいては、各語基「ぱち」と「くり」の第2母音 /i/だけは共通である。しかし他の三つの音素は異なっているので、この語は語基が交替しているものとみなす。

語基が交替するものにも、いくつかのパターンがある。そのうちの一つは、各語基がそれぞれ別個の事象を描写し、事象の起こる順序通りに語基が配列されているというものである。この類の語を下に列挙する。

(12) すってんころり　すってんころりん　すてんころり　ずでんどう　どんぴしゃり

これらの語は、「どんぴしゃり」以外はいずれも滑って転んだ様子を描写しているものである。前半の語基は「すて」であり、滑る様子を表わしている。「すってん」はオノマトペ標識Qが挿入されて語末にオノマトペ標識Nがついた形、「ずでん」は無声子音が二つとも有声化されてオノマトペ標識Nがついた形である。後半の「ころ」「どう」は滑った後に転ぶ様子を表現している。「どんぴしゃり」は、「どん」と鉄砲を撃って「ぴしゃり」と的に当たるというあたりが語源であろう。現在では、指摘した内容が的確であるという様態を比喩的に表現する用法になっている。

次に掲げるのは、個々の語基が別個の事象または音を描写しているが、個々の事象は同時多発的であり、生起する順序は関係ないという類の語である。

(13) がたぴし　がたびし　どんぱち　どんちゃん　ぴんしゃん　ぴんしゃこ　ぱちくり
ぴーひゃら　とんちんかん　ちんちろりん　ちゃんちゃんばらばら
しゅっしゅっぽっぽっ

「がたぴし」「がたびし」は後半の語基「ぴし」「びし」において、/p/-/b/ という第1子音が有声―無声で交替している。「ぴんしゃん」「ぴんしゃこ」は後半の語形「しゃん」「しゃこ」が変化を示しているが、意味は同じである。この2語は、年を取ったり病気や怪我から快復した直後でも矍鑠としている様子を表現している。それぞれの語基「ぴん」「しゃん」は精力が溢れているという様態である。「ぴんしゃこ」の語尾は「*ぴんしゃんこ」から変化した可能性も考えられる。即ち、「ぴんしゃん」に「こ」が接辞した、という仮定が成り立つ。のちに二番目の撥音「ん」が脱落して「ぴんしゃこ」と変化した、という一連の過程が想定できる。類似の語形として「ぺちゃんこ」「ぺしゃんこ」「ぺっしゃんこ」などが挙げられる。これらはそれぞれ「ぺちゃん」「ぺしゃん」「ぺっしゃん」という、オノマトペ標識Nが接辞した派生形に更に語尾「こ」が加わった語形である。オノマトペ標識Nと語尾「こ」の二重接辞となっている。「ぴんしゃこ」では、途中の仮定形「*ぴんしゃんこ」から第4モーラのNが脱落したと推定したのに対して「ぺっちゃんこ」などでは末尾から2モーラ目のNが保存されている。「ぺっちゃんこ、ぺっしゃんこ」は5モーラであるから、モーラ数という観点で「*ぴんしゃんこ」という語形を阻止する理由は成立しない。可能性として、「ぴんしゃん」では撥音が二つ並立していることから無異原則（Obligatory Contour Principle：OCP）が関与し、「こ」による二重接辞を阻止した、とも考えられる。詳細の追求は次の機会に譲る。

これらの語のうち、純粋に擬態語と言えるものは、「ぴんしゃん」「ぴんしゃこ」だけである。「ぱちくり」は、驚いて目を開けたり閉めたりする様態を描写している語であるが、目を「ぱちぱち」と開閉したり「くりくり」と回転させる様態に、音を感じさせる要素がある。「ぱちくり」を含めても、擬態語は擬音語よりも少ない。

「ぴんしゃん」「ぴんしゃこ」「ぱちくり」以外の語は純然たる擬音語である。数例について説明をすると、「がたぴし」「がたびし」は、前半の語基「がた」が硬い物が震動して立てる音を表現し、後半の「ぴし（びし）」がひび割れするような鋭い音を描写している。/pisi/と/bisi/は、第1子音が無声／有声という素性で対立を示している。「どんぱち」は、前半が銃声、後半が火薬のはじける音の描写である。意味・用法は擬音語から発展し、名詞として「戦争、戦乱」を意味する。例えば「どんぱちが始まった」と言えば、戦端が開かれたことを述べている。

形態素数で見ると「とんちんかん」「ちんちろりん」が3語基交替、「ちゃんちゃんばらばら」と「しゅっしゅっぽっぽっ」が2語基ABの反復AABB、それ以外は2語基の非反復である。

この節で検証した語基交替形17例は、いずれも自由型語基動詞が組み合わさって形成されている。唯一「がたぴし」の後半「ぴし」が、単独の語基としては石礫などが命中する音やひび割れが走る音、鞭を振るう音などを描写する用法が主であり、交替形「がたびし」の描写する様態とは隔たりが見られる程度である。

8．むすび

以上日本語オノマトペ語彙の交替形について、音素／モーラ（音節）／語基という交替のレベルを設定して検討を加えてきた。各レベルでの分類において語基が自由型であるか、拘束型であるかという基準が示差的であった。検証の結果、第6節(11)モーラ単位の交替形においてのみ拘束型が見られた。/CVCV/という2音節語基において母音または子音という音素レベルではなく、語基全体でもなく、モーラ交替の場合のみに拘束型語基がみられることは、その原因を追及するのが今後の研究において課題の一つとなる。

部類として、雲雀「ぴーちくぱーちく」・鶏「こけこっこー」・鳶「ぴーひょろひょー」と動物、特に鳥類の鳴き声は交替形が多い。これらの語形は「聞きなし」と呼ばれてきた。例えば現代においては鶏の鳴き声は「こけこっこー」と定型化されているが、江戸時代では「とーてんこー」と聞きなし、「東天紅」という字まで当てていた（山口（2003：162））。このような聞きなしの例では「東天紅」という字を当てるために鳴き声を「とーてんこー」と表現したものか、あるいはその逆で純粋に擬音語として「とーてんこー」と描写してその後に漢字を当てたのか興味深い。「とーてんこー」は3音節・6モーラ、「こけこっこー」は4音節・6モーラと、後者の方が1音節多い。他方で子音の種類は前者が/t k/の2種に対して後者は/k/1種類のみである。いずれの語形が音韻的に複雑かというのは単純な議論ではないが、このように聞きなしが時代と共に変遷を辿るというのは歴史的事実である。

最後に、交替形と反復型語形の本質的な差について比較しておきたい。反復型は語基の反復という語形成過程そのものがオノマトペ的語感を齎す、という前提が成り立つ。反復型語基のうちにも、語基が表現する様態の抽象性に程度の差が認められる。しかしながらこの小論で試みた、交替形語基の自由型と拘束型における差よりは小さい。例えば「へべれけ」という4音節語形で初めて酩酊している状態として捉えることが出来るが、これを前後で分離して「へべ」、「れけ」というのみでは意味を成さない。このように語基の抽象性／具体性という表現力を比較すると、日本語オノマトペという語彙範疇の特性からして反復型が無標で

あり、交替形は有標であると断定できる。

参考文献

Akatsuka, Noriko M. and Susan Strauss. (eds.) (2002) *Japanese and Korean Linguistics*. Vol. 10. Stanford: CSLI.

Hamano, Shoko. (1998) *The Sound Symbolic System of Japanese*. Tokyo: Kurosio.

Haraguchi, Shosuke. (2001) "On *Rendaku.*" *Phonological Studies*, Bulletin of the Phonological Society of Japan. Vol. 4.

堀井令以知 (1973)『日本語語源辞典』東京：東京堂出版。

Kadooka, Ken-ichi. (1993a) "The Derivation Structure in Japanese Onomatopoeia." in *Proceedings of Kansai Linguistic Society* 13. Kansai Linguistic Society.

角岡賢一 (1993b)「日本語の擬似オノマトペ」筧・田守 (編) (1993) 所収。

角岡賢一 (2001a)「日本語オノマトペ語彙派生過程における語基」『龍谷大学国際センター年報』第10巻。

角岡賢一 (2001b)「日本語における『かな擬似オノマトペ』」『龍谷紀要』第22巻第2号。

角岡賢一 (2002a)「日本語オノマトペ語彙の接辞」『龍谷大学国際センター年報』第11巻。

Kadooka, Ken-Ichi. (2002b) "Onomatopoeia Markers in Japanese." in *LACUS FORUM 28*. Linguistic Association of Canada and the United States.

角岡賢一 (2003)「日本語オノマトペ語基の多義性について」『龍谷大学国際センター年報』第12巻。

角岡賢一 (2004)「日本語オノマトペ語彙の語源について」『龍谷大学国際センター年報』第13巻。

Kakehi, Hisao. (1981) "The Function and Expressiveness of Japanese Onomatopes." *Bulletin of the Faculty of Letters, Kobe University.*

筧壽雄 (1993)「文学作品に見られるオノマトペ表現の日英対照」筧・田守 (編) (1993) 所収。

筧壽雄、田守育啓 (編) (1993)『オノマトピア』東京：勁草書房。

Kakehi, Hisao, Ikuhiro Tamori and Lawrence Schourup. (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*. Berlin: Mouton de Gruyter.

黒田成幸 (1967)「促音及び撥音について」『言語研究』50。

Kuroda, Shige-Yuki. (2002) "Rendaku." in Akatsuka and Strauss (eds.)

Lyman, Benjamin Smith. (1894) *Change from Surd to Sonorant in Japanese Compounds*. Philadelphia: Oriental Club of Philadelphia. Japanese translation in Yanaike (1991).

McCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.

村田忠男 (1993)「日本語のAB型オノマトペ・重複形・等位構造表現の関係」筧・田守 (編) (1993) 所収。

那須昭夫 (1998)「強調形オノマトペの韻律構造」関西音韻論研究会における口頭発表。

日本大辞典刊行会 (1979)『日本国語大辞典』東京：小学館。

新村出（編）（1983）『広辞苑』（第三版）東京：岩波書店。
田守育啓（1991）『日本語オノマトペの研究』神戸：神戸商科大学。
田守育啓（2002）『オノマトペ　擬音・擬態語をたのしむ』東京：岩波書店。
田守育啓、ローレンス・スコウラップ（1999）『オノマトペ－形態と意味』東京：くろしお出版。
Waida, Toshiko.（1984）“English and Japanese Onomatopoeic Structures.” in *Bulletin of Osaka Women's University, Studies in English*. Vol. 36.
山口仲美（編）（2003）『暮らしのことば　擬音・擬態語辞典』東京：講談社。
屋名池誠（1991）「〈ライマン氏の連濁論〉原論文とその著者について」『百舌鳥国文』11号。大阪女子大学。